



第120回

万博以後と万博ロゴ

※2025年10月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 2

万博記念公園（大阪府吹田市）
に建つ1970年大阪万博のシンボル「太陽の塔」はどう見つめただろう。大阪市此花区の人工島・ゆめしま夢洲で開催された「2025年大阪・関西万博」が終了した。

会場から北西10キロほどの此花区内に正蓮寺川公園がある。区民による環境問題の克服により生まれた公園という。今年の区制100年目にあわせ、長い歳月をかけて、公園内に100以上のパブリックアート作品を順次設置していく計画が進行中だ。アートの魅力で多くの人々に愛されるまちづくりをしようという目的からだ。

プロジェクト名は「Konohana Permanent

e 100+（コノハナペルマネンターレヒャクプラス）。ペルマネンターレはイタリア語で「長きにわたって持続していく芸術祭」を意味し、現在、6作品が公園に展示されている。

大阪・関西万博のロゴシンボルが立体化された陶器製のモニュメントに目を引く。万博の公式キャラクター「ミyakミyak」の頭部を飾っていることでも知られるデザインだ。「いのちの輝き」をテーマに表現された赤い球体「セル（細胞）」が輪をな為した作品で、70年大阪万博のDNAを継承する意味も込められている。3月に完成した。

制作者のTEAM INARI

のシマダタモツ代表は「親しんでもらえるフォルムを追求しました。未来へつながるものを残すことがうれしい」と話す。素材に陶器を選んだのは優しい手触りや奥行き感が生命の営みを感じさせるからという。耐候性が優れている点も理由で、長く触れあえる作品にしたいとの願いがあった。

公園には関連作品として「CELL ART」がこの夏に登場した。先に設けたロゴシンボルから分裂した球体が地面に転がったようなイメージ。芸術家・岡本太郎さんが残した太陽の塔内部の「生命の樹」にも通じる印象だ。二つの作品が見渡せる空間に立つと「有機的・発展的にいのちを紡いでゆくんです」と語っていたシマダさんのコンセプトの広がりを実感できる。

終盤に向かうにつれ、「盛況」となった万博後、正蓮寺川公園を巡るのはおすすめだ。済み渡った

空の下、深呼吸をする。季節はすっかり秋だ。